

TS（トータル・サティスファクション）を目指して⑮

「送りバント」できますか？

校長室担当より

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いします。

年齢によって差があると思いますが、阪神タイガースで選手や監督として活躍された吉田義男さんを御存じでしょうか。その方が1990年から5年間フランスのナショナルチームを監督として任された時、野球というスポーツが日本ほど人気ではないこの国で、「送り（犠牲）バント」や「犠牲フライ」をフランス人の選手に教えることがとても難しかったそうです。フランス式の考え方では、ホームランやヒットで華々しく活躍することが一番の目標であり、ランナーや次のバッターのために犠牲になることなんて考えられないということでした。

しかし日本では、力がないから犠牲になるのではなく、力があるからこそ犠牲になれることが理解されています。「和をもって貴しとなす」という言葉が聖徳太子の17条憲法に示されているとおり、昔から日本では人の「和」を大切にしてきました。しかしそれは単に仲良くすればいいということではありません。自分の意見や信念をきちんともった上で、互いをリスペクトして調和を図る。どこかに無理がきているなら、お互いが少し我慢できる部分を探し、痛みを分け合い、協力することであると考えています。これこそが、この学校のめざす「トータル・サティスファクション」の基本です。

「送り（犠牲）バント」や「犠牲フライ」に象徴される「自己犠牲」という言葉の意味は、たとえ自分に余裕がなくても、自分にできることがないかを考えて動くことだと思います。こう考えると、「犠牲」は「手助け」とも解釈できます。自分に余裕があるときだけ、他者の「手助け」をするのではなく、むしろ余裕のないときに、自分が少し「犠牲」を払ってでも相手の困っていることに気づき、「手助け」をする。そうすれば、相手も同じく、自分に余裕がなくても「何かできることはないか？」と声をかけてくれるようになる。自然にそういう関係になれる組織は、本当にすばらしい組織になります。ぜひ、実現したいと思います。

最近、誰かの「手助け」をしたことがありますか？「よかったらこれ使ってください。」とか「暇だったのでこれやっておきました。」と、さりげなく相手に言われる前に動く、これは「犠牲」ではなく「手助け」に変わります。時には、この行為を「余計なおせっかいだ。」と言う方もいらっしゃるかもしれませんが。でもそんな時にも平常心を保つことが本当の意味で「手助け」になると思います。なぜなら「ありがとう」と言ってもらうことが目的になると、それは本当の意味での「手助け」ではないのですから。私はこの学校は、「ありがとう」という言葉が交わされるだけでなく、知らないうちに物が整えられていたりするような、「ありがとう」があちこちに顔を出す職場であると信じています。いい学校を創りましょう、一緒に。(令和4年1月11日)

本校教職員として目指す方向性（確認）

※令和3年4月1日にお願ひしたこと

- 1 トータル・サティスファクションの実現
- 2 学びに向かう力をもつモデルを率先垂範
- 3 対話とパートナーシップに基づく行動
- 4 全教職員で全校の児童生徒を見守るチームの実現
- 5 「今さえ、ここさえ、自分さえよければいい」の考えを戒める